

Title	魯迅と富田事変 (初稿) : 江西根拠地におけるAB団肅清問題と毛沢東
Sub Title	Lu Xun's attitude toward Futian Incident in 1930 Mao Zedong's role in Purging AB's (anti-Bolsheviks) and Futian Incident at Jiangxi Base
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.2 (2009.) ,p.91- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20090331-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魯迅と富田事変（初稿）

——江西根拠地におけるAB団肅清問題と毛沢東——

長堀祐造

1. 増田渉著『魯迅の印象』…同伴者作家は語る、「農民を殺すのはよくない」と。

増田渉の著書『魯迅の印象』の中にこんな一節がある。

「私が上海にいたころ、中共の根拠地は瑞金にあった、そのころ瑞金に対しては屢々国民党政府軍によって所謂剿匪攻撃が行われていると聞いていた。そんなことからのイザコザ事件に端を發したのかも知れないが、彼は或るとき私に云った、付近の農民たちを共產党が殺しているという噂がある、農民を殺すのはたといどんなことからであろうとよくない、我々は人をやって調査し、もし本当なら中共に殺しちゃいけないと忠告することを決心したと。彼は中共に加入してはいなかったが、しかしシンパではあったと思う、自ら同伴者作家とい



写真1 増田渉訳サイレン社版『支那小説史』。日本大学文理学部社会学科所蔵。

っていたから。しかしやはり人を殺すということは、彼には如何なる理由によっても黙視することは出来なかった、調査の上、もし本当なら忠告すると決然とした態度で語ったが、私はそのときヒューマニストと云われる彼の真面目を見たように思った。何か熱情的な態度であった」¹⁾

周知のように増田渉は魯迅から、直接個人教授を受けた、数少ない日本人で後に著名な魯迅研究者となった。内山完造は「何ヵ月かの間、魯迅先生から直接教えを受けた人は、日本人の中では私の知ってる限りでは増田さんと鹿地さんだけであると思う」と証言している。²⁾ここでまず、増田渉の経歴について簡単に確認しておきたい。

増田渉（一九〇三〜一九七七）島根県八束郡恵曇^{えとむ}村生まれ。旧制松江高校在学中、芥川龍之介、佐藤春夫らの作

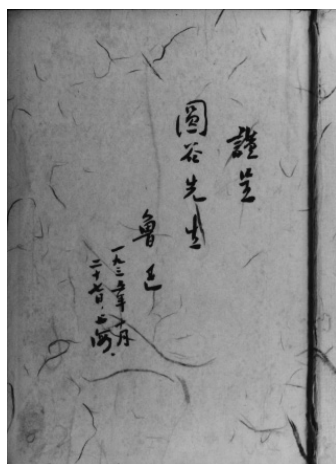


写真2 同前、扉にある魯迅の署名。円谷弘に宛てたもの。注3の拙稿「円谷教授宛の魯迅署名本見つか」参照。

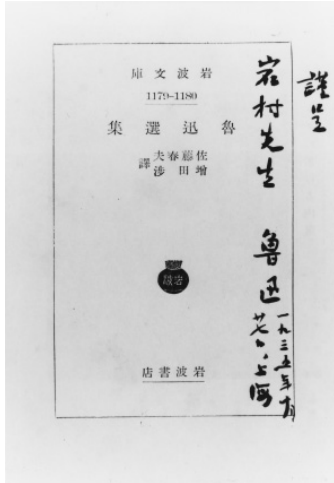


写真3 佐藤春夫・増田渉訳岩波文庫版『魯迅選集』の扉。魯迅が岩村一夫に宛てた献辞と署名。注3の拙稿「上海内山書店と魯迅をめぐる風景」及び「魯迅と円谷弘」（『中国図書』、一九八九年七月号）参照。

店、一九五六年、竹内好、松枝茂夫と編訳）。主著に『魯迅の印象』（講談社、一九四八年初版）、『中国文学史研究』（岩波書店、一九六七年）などがあり、死後、『魯迅・増田渉師弟答問集』（汲古書院、一九八六年）が出版されている。このうち、岩波文庫版『魯迅選集』は戦前十万部を売り、日本及び日本植民地下の台湾、朝鮮半島における魯迅作品の普及に貢献した。⁽³⁾

なお、旧制松江高校時代の増田と芥川との間に

品に影響を受け、中国文学に関心を抱く。一九二九年、東京帝国大学支那文学科卒。在学中から詩人・作家佐藤春夫に師事、翻訳の手伝いなどをする。一九三一年上海に渡り、同年三月から十二月まで魯迅に個人教授を受ける。帰国後、一九三四年に竹内好、武田泰淳らと中国文学研究会を結成、魯迅没後すぐ、『大魯迅全集』の出版責任者として改造社に招かれ、一九三七～一九三九年同社社員。以後、興亜院、外務省に勤務。戦後、一九四九年、島根大学文理学部教授、一九五三年、大阪市立大学文学部教授、一九六七年、関西大学文学部教授、一九七四年定年退職。一九七七年三月十日、竹内好の葬儀で弔辞を朗読中に倒れ、同日死去。主な訳著に『世界ユーモア全集（12）』（改造社、一九三三年、佐藤春夫らとの共訳）、増田訳「阿Q正伝」「幸福な家族」を含む）、魯迅著『支那小説史』（サイレン社、一九三五年ほか）、『魯迅選集』（岩波文庫、佐藤春夫との共訳、一九三五年）、『支那印度短編集』（河出書房、一九三六年、佐藤春夫らとの共訳）、増田訳「眉間尺」を含む）、『魯迅選集』全十二巻・別巻一（岩波書

通信があったこと、またそれを通じて増田が中国文学専攻を決意したことが「増田渉先生略歴」(『啞』第八号、注3参照)に書かれているが、『芥川龍之介全集』第二十卷「書簡Ⅳ」(ここでは岩波書店、一九九七年による、一〇六―一〇七頁)には、確かに以下のような増田宛書簡が収録されている。

〔大正十三(一九二四)年〕 12月29日 増田渉「宛」 田端から

冠省渭塘奇遇記は剪燈新話にありますどこにでもある本です御手紙の御返事のおくれたのはお気の毒ですが、多病と多忙の為と御ゆるし下さいその代り誰も知らぬ事を申し上げますわたしは松江にゐた時、松江紀行のやうなものを書いて松陽新報にのせて貰いましたこれがわたしの芥川龍之介と署名して書いた第一の文章です。当時わたしは恒藤恭の(今の京大の助教授の)お花畑の家に同居してゐました新聞へ文章を書いたのも恒藤の紹介です勿論原稿料などは一文も貰はずに書いたのですその時文中、永坂石埭氏の悪口をちよつと云つた所が新聞社の人は其処だけ削つてしまひました以上つまらぬ事ながら、小閑を得たのを幸ひに書き加へました 頓首

十二月二十九日

芥川龍之介

増田渉様⁴⁾

こういう縁も『魯迅の印象』中に現れる増田の魯迅と芥川に関する記述を考える上で興味深い。

さて、一九三一年春、二十代後半の増田青年はまだまだ有名人ではない。その増田青年が魯迅といかにして接触をもつようになったか、『魯迅の印象』で本人はこう語る。引用が長くなるが、魯迅と増田との師弟関係の深さ、そ

の信頼關係を確認することは本論における増田証言の信憑性の前提となる（魯迅作品の翻訳問題でもこのときの個人教授の内容は重要だ。注6参照）ので、お許しいただきたい。

「私は学校を出てから（学校にいる時からであったが）しばらく佐藤春夫氏の手伝いをして中国小説の翻訳などをしていたが、頻りに中国へ行ってみたくなつて、千枚ぐらいの長い翻訳が一段落ついた時、それをしおに上海に行く決心をした。それは昭和五年の暮れであったが、船の都合で翌六年三月に上海についた。最初は一箇月ぐらいの旅行のもりだったし、当時は別に中国の文壇事情についてあまり注意していたわけではなし、魯迅が上海にいることなど初めから知っていたのではない。ただ、佐藤春夫氏から内山完造氏宛の紹介状をもらっていたので、或る日内山書店を訪ねたら、丁度魯迅が上海にいる、しかも毎日同書店にあらわれると聞いた」（ミリオン・ブックス版、十六頁）

「私はとにかく、彼に就いて勉強しようという気持ちから、最初は毎日内山書店へ、彼があらわれる時間を見はからつて出かけて行つた。多分私が彼に向つて、中国の文学を勉強するにはどんな本から読んだらいいかとも訊いたものだろうが、彼は自分の幼少年時代の思い出を書いた『朝花夕拾』という本をくれた。私はその本を私の下宿で読んで行つて、不審な字句や内容の事柄について、翌日内山書店で彼から教えてもらつた——ということ当分つづけていた。『朝花夕拾』は彼の幼少年時代（及び日本に留学していた頃）の彼とその周囲を回憶したもので、就中、中国の生活的風習と、その中に生長するものの幼い夢をふりかえつたものである。他国から来た私に、そして中国のことを勉強しようとしている私に、まず何よりも先に中国の生活的風習とその雰囲気を知らせようとの用意からであつたのだと思う。それは二百頁足らずの本であつたし、一週間ぐらい

で読み了えてしまったが、その次には『野草』という彼の散文詩をくれた。散文詩といっても抒情的なものではなく、激しい怒り（政治的な意味をもつ）を託したものが多かったが、何が故にそういうものが書かれたか、その具体的な当時の事情についてのこまかい知識に乏しかった私には、正直のところよく呑み込めなかったが、ただ痩せて、蒼白な顔をしている目の前の彼が、煮えたぎる強烈な憤怒の感情をもつことのできる人だということを知った。

その次に『中国小説史略』についての質問をはじめた。それは最初から翻訳するつもりであつたし、（内山完造氏がそれをすすめた）殆ど一字一句講解してもらつた。その頃は内山書店の店頭ではなく、魯迅の宅に直接出かけるようになっていた。内山での「漫談」（当時そういつていた）をすますと、彼と共に彼の宅へ行き、（内山からその宅までは二分か三分の距離）それから彼のテーブルに二人並んで腰かけ、私が小説史の原文を逐字的に日本語にして読む、読みにくいところは教えてもらう、そして字句なり内容なりについて不審のところは徹底的に質問する。その答えが、字句の解釈なら簡単であるが、内容となると色々の説明があるので相当時間がかかる。大てい午後の二時或は三時頃からはじめて夕方の五時か六時頃までつづけた。むろんいつしか雑談に亘つたり、日々生起する時事に対する意見や批評をきいたりする合の手がはいることも多かつたが、凡そ三箇月はその本一冊の講義に費されたと思う。当時、彼は外部と殆ど交渉をもたなかつたから客はまずなかつた。広い書齋兼応接間に、夫人の景宋女史が少し離れたところで彼女自身の仕事（本を読んだり、抄写をしたり、編物をしたり）をしているほか（息子の海嬰は子守婆がいつも外へつれて出ていて部屋にはいなかった）彼と私と二人きりで、邪魔ものもなく、私は十分教えをうけることが出来た。許壽裳の編した魯迅年譜をみると、それは魯迅自身の日記によつたものと考えられるが、民国二十年、七月の條に「増田渉のため、『中

『国小説史略』を講解し全部を畢る」とあるが、これが済んだときは、私もホッとしたが、彼もホッとしたであろうと思われる。それから『呐喊』と『彷徨』との二小説集の講解も終ったのがその年の暮れであった。私はだからその一年、春夏秋冬、毎日彼の書齋に通ったわけである。そして一日、三時間くらい彼の個人教授をうけたことになる。毎日景宋夫人から点心とお茶を接待され、また一週間に二回くらいは彼の食堂で晩飯をよばれた。実に飽きもせず、諄々として彼は手をとるようによく教えてくれた。私は感謝の言葉もないほど今でも彼の恩に感じている」。(ミリオンのブックス版、十七頁～十九頁)。

さて、ここからわかるとおり、増田渉が上海にわたり、『中国小説史略』『呐喊』『彷徨』の一字一句について、魯迅自身から実に親身な個人教授を授けられたのは、一九三一（昭和六）年三月から十二月末にかけての十ヶ月間である。増田が言うごとく、この時期、瑞金には中共の中央革命根拠地があった。正確を期すために資料を引いておくと、手許の『中国現代史地図冊集』（中国地図出版社、一九九九年）には次のような記載がある。

「中央根拠地：贛「江西」南、閩「福建」西革命根拠地からなる。一九二九年初め、毛沢東、朱徳が紅四軍の主力を率いて贛南に入り、贛南根拠地を開いた。「中略」一九三〇年二月、中共贛南、贛西、湘「湖南」贛辺三区特委は合併して贛西南特委となり、三月、贛西南ソヴェエト政府が成立した。一九三〇年六月、紅一軍団が成立し、朱徳が総指揮、毛沢東が政治委員となった。後に、閩西と贛南は次第に一体化し、瑞金を中心とする中央革命根拠地を形成した」（同書五五頁。「」内は長堀注。なお、当時の中共及び紅軍組織の詳細は中共中央組織部等編『中国共産党組織史資料』第二卷（下）、中共党史出版社、二〇〇〇年、の表98及び二一六一頁以下を参照のこと）。ここに毛沢東を主席とする中華ソヴェエト臨時政府が樹立されるのは一九三二年十一月のことだ。そしてこれも増田

の言うとおりだが、歴史的に五次を救えた国民党による共産党の中央根拠地に対する「剿匪攻撃」は増田が上海にいた一九三一年末までには三次を経過していた。

つまり、本稿冒頭で引いた魯迅が聞いた共産党が根拠地付近の農民を殺しているという噂は、長く見積もつても一九三〇年後半から一九三一年末に至る時期のできごとと考えられる。

そしてこの噂とは、中国共産党史上、もっとも敏感な事件の一つであるA B団粛清運動と、これに起因する富田事変にかかわる粛清と見て間違いあるまい。その「敏感」たる所以は、この富田事変が、国民党の反共組織「A B団」が主導し、取消派・トロツキー派などと協力して起こした「反革命事件」とされ、毛沢東が紅軍第一方面軍総前敵委員会書記として直接その鎮圧を指揮したものだが、今では党史研究者によって実際は冤罪事件だったと主張されている、いわば毛沢東による仲間殺しの嚆矢にして最たるものだからである。富田事変前後を通じてA B団として殺されたものの数は少なくとも数千数万の規模とみられる。当然ながら富田事変に関して、中共による正式な名誉回復は行われていない。最近、岩波書店から出版された韓鋼著『中国共産党史の論争点』（辻康吾編訳、二〇〇八年七月）は、この問題を二十の論争点の一つとしてわざわざ数頁ながら、事件と論争の概略を記し、以下のように締め括っている。

「一九九一年、中共中央党史研究室編纂の『中国共産党歴史』上巻に事件についての新しい記述が現れた。つまり「A B団」、「社会民主党」との闘争は、重大な憶測と強要された自白の産物で、敵味方をいっしょくたにし、多くの冤罪、でっちあげ、誤審を生み出し、各根拠地での反革命粛清は程度の差はあれ、拡大化の過ちを犯し、革命業務に重大な危害を加えた、と述べている。これはある程度の名誉回復ではあった。だが学術界は

決して満足せず、いかなる冤罪、でっちあげ、誤審についてもすべて党中央の正式な文書があるべきだとしたが、一部の人物の干渉によって現在までのところそのような文書はまだ出されていない」（十二二頁）

富田は瑞金から北西約一二〇キロメートル⁽¹⁰⁾。「江西省吉安県の大きな村で、土地革命時期「一九二七―一九三七年の国共内戦期」の一時期には江西省委、省ソヴィエト政府の所在地であった」という。⁽¹¹⁾

増田が記した「農民たちを共産党が殺しているという噂がある、……もし本当なら中共に殺しちゃいけないと忠告することを決心した」という魯迅の言葉と中共党史上の一大論争点であるこの富田事変と関連づけた論考は、管見の限りではないようだ。今回、敢えていささか詳しく述べる所以である。

2. AB団肅清と富田事変

ここでは富田事変について、その経緯を見ておきたい。毛沢東史観に基づく中共正史からすると、富田事変とは、一九三〇年十二月に、紅二十軍内に巢食う国民党の反共組織AB団分子が、トロツキスト取消派などと結託して江西省富田で中共に対して起こした反革命暴動で、徹底的に鎮圧された事件ということになる。また、その後の苛烈な肅清の行きすぎも王明ら他の指導者の責任ということになってきた。⁽¹²⁾

しかし、一九七〇年代末から党史研究者は、この富田事変やAB団肅清問題の中共党史における見直しを提起している。これを先導したのは、中共江西省委党校党史研究室主任の戴向青教授であった。⁽¹³⁾ 中共党史研究の領域

で、この問題に関するもつとも詳しい専著にこの戴向青と羅惠蘭の共著『A B 団与富田事変始末』(河南人民出版社、一九九四年初版、本稿では二版、一九九六による)がある。のちには、高華著『紅太陽是怎样昇起的』(香港中文大学出版社、二〇〇〇年)や日本語訳では韓鋼著のほか、張戎(ユン・チアン)著『マオ』(土屋京子訳、講談社、二〇〇五年)¹⁵、北海閑人著『中国がひた隠す毛沢東の真実』(廖建龍訳、草思社、二〇〇五年)がこの問題を大きく取り上げるが、いち早くこの問題に触れていたのは福本勝清の一連の著作、『中国革命への挽歌』(亜紀書房、一九九二年)、『中国共産党外伝』(蒼蒼社一九九四年)、『中国革命を駆け抜けたアウトローたち』(中公新書、一九九八年)であった。¹⁶ここでは、主として戴向青の論文「論A B 団和富田事変」(中共中央党校党史教研部編『中国共産党重大歴史問題評価』第一冊、内蒙古人民出版社、二〇〇一年、所収)、高華著「肅A B 団事件の歴史考察」(香港『二十一世紀』誌一九九九年八月)などから概要を描いてみる。なお、台湾の資料として、初期の中共黨員でのちに台湾に渡り「反共大師」となった鄭学稼の『中共富田事変真相』(国際共産問題研究所、一九七六年、台北)¹⁷や近年のものでは、陳永発著『中国共産革命七十年』上(聯経出版事業公司、一九九八年)もある。

戴論文冒頭は言う。「一九三〇年五月、贛西南ソヴィエト区の反A B 団闘争は党の様々な機関で広く展開され、九月に高まりを迎え、十一月には地方から軍に広がり、十二月には地方と軍が一体となってこの闘争を進めた。そして、でたらめなA B 団逮捕・殺戮に対する紅二十軍の一部による反抗として富田事変が勃発した。その後、極「左」臨時中央は「富田事変はA B 団が指導する反革命暴動」と規定した。これによって、さらにA B 団逮捕殺戮の高まりが巻き起こった。反A B 団と富田事変は相互に関連しているが、今に至るも徹底した名誉回復が行われていない、歴史的大冤罪案件である」と。¹⁷

そもそもA B 団という国民党の反共組織は、江西省の国民党組織が国共合作の下で共産党に握られていた実権を

国民党に奪還すべく蒋介石の指示で国民党中央から派遣された段錫朋が組織したものであったが、一九二七年一月の活動開始から、わずか三カ月後の四月三日には、共産党勢力によって徹底的に粉砕されてしまっていた。さらに、その直後に蒋介石が発動した四・一二反共クーデタによって、もはやこの組織は再建の必要もなくなり、完全に消滅してしまっていたのである。

ところが、三年後の一九三〇年五月、A B団の亡霊が復活する。贛「江西省」西南ソヴェト区で共産党内のA B団粛清が始まるのである。過酷な拷問によってA B団員が次々と「摘発」されていき、四万の紅軍中、四四〇〇人がA B団とされたという。さらに十二月、紅軍第一方面軍総前敵委から派遣された李韶九は富田に着くや、江西省行委「行動委員会」でA B団摘発を行い、百二十人を逮捕、二十四人をすぐさま処刑した。続いて、紅軍第二十軍でも同様の粛清を行おうとするが、同軍は大革命期から功績があり、その幹部たちをも対象に含めたあまりにもでたらめな粛清に対し、李韶九が行なっているのはA B団粛清に名を借りた贛西南幹部殺害の陰謀だとみなし、同軍幹部は李を逆に逮捕、A B団として逮捕されていた江西省行委の仲間を釈放したうえ、共産党中央に事の次第を報告し、事態の処理を要請したのである。これが富田事変である。紅一方面軍総前敵委員会はただちに富田事変を「A B団取消派合作の謀反」と規定したが、一九三一年一月の項英を主席とするソヴェト区中央局の「富田事変に対する決議（対富田事变的決議）」は客観的にはA B団、取消派など共同の反動行動だが、「A B団取消派合作の謀反」とは規定せず、両者の調停を試みる。しかし三月、中共中央政治局は「富田事変に関する決議（関于富田事变的決議）」を採択、「富田事変は階級敵と他の闘争機関、A B団が準備、執行した反革命暴動」と認め、事変処理に派遣された中共中央代表团とソヴェト区中央局は四月、同名の「富田事変に関する決議」を採択、「富田事変はA B団が指導し、立三路線を旗幟とする反革命暴動」と規定し、七月までに富田事変の首謀者を一網打尽に

して処刑した。残存した紅二十軍は紅七軍に編入され、二十軍の名は消滅した。しかし戴論文の結論部は、富田事変の主導者はA B団とは全く無関係だったとし、それは彼らが従前毛沢東の根拠地建設にも協力していたことから明らかだとする。そしてこのA B団肅清、富田事変という反革命事案の名譽回復を訴えて終わる。

この富田事変を直接に惹起した人物、李韶九を富田に派遣しA B団肅清を指示したのは紅一方面軍の総政治委員、総前敵委書記毛沢東にほかならず、李は毛沢東の同郷で側近（当時の李の地位は紅一方面軍政治部秘書処処長）でもあった。

高華は一步進んで、毛沢東のA B団肅清、富田事変への対応など一連の動きを、毛の江西ソヴィエト地区における権力確立過程の一段階と見る。つまり、井冈山を下りた毛沢東は江西ソヴィエト区で指導権確立を図るが、李文林をはじめとする地方紅軍と地方党组织の抵抗にあつて、矛盾が先鋭化していったのである。土地改革政策でも地方組織は中共第六回大会の「劣紳地主の土地没収」決議実行を主張、「すべての土地の没収」を主張する毛沢東に反対した。毛沢東は、これは「富農路線」、「トロツキー」陳独秀路線だとし、「地主富農」肅清闘争を布告したという。つまるところ、毛沢東はA B団肅清に名を借りて、江西ソヴィエト区内の対抗勢力を消滅させていったということである。⁽¹⁸⁾客観的に見て、こうした側面は否定できない。毛沢東はかつて論敵であったものや、知識人、地主、富農出身の黨員など多数を処刑したという。もちろん、中共中央の権力を篡奪した王明ら留ソ派指導部が、富田事変直後には毛沢東による肅清を支持した動きも見逃せない。この時期、スターリンの中国における代理人たる王明と、権力掌握のためにはライバル抹消をもいとわぬ毛沢東の利害が一致していたとみるべきであろう。毛沢東がわざわざ「A B団」と「取消派」トロツキー派を一緒にして弾圧しているのは、モスクワや王明たちを意識してのこととれなくもない（但し、スターリンが肉体的抹殺を反対派肅清の手段とするのは、一九三四年以降

のこと。この点では毛沢東の方が先んじていたわけだ。

福本勝清の記述を借りてもう一度簡単にこの富田事変を要約すると以下のようなになる。

「一九三〇年に江西根拠地で起きた富田事変は、本来江西根拠地の指導権をめぐる毛派と江西地方党部の抗争が原因であったが、毛沢東等により、A B団に乗っ取られた江西党部の反革命暴動と誣告される。しかも江西地方党部が李立三路線下の党中央に従い毛沢東と対立していたため、「第六期」四中全会で党中央を奪取した王明たちは、江西地方党部＝A B団（国民党の別動隊、特務組織）＝李立三路線＝トロツキズム＝陳独秀・トロツキー派、という壮大な粛清の公式を發明、江西根拠地のみならずすべての革命根拠地における粛清運動に適用した。そのため、閩西、海南島、湘鄂贛、洪湖、川北などの根拠地において、托派、陳托派（*chentopai*）「陳独秀・トロツキー派の意」として多くの革命家が粛清されている」⁽²⁰⁾

毛沢東は一九三一年十一月、中華ソヴィエト共和国臨時政府主席のポストを与えられるものの、一方では同共和国中央革命軍事委員会の発足に伴う、紅一方面軍の総前敵委員会と同軍總部解消の結果、それぞれにおける書記と総政治委員のポストを失って、軍事指導権を失ったのである。⁽²¹⁾王明ら党中央によって、毛沢東の権力は弱体化され、以後、一九三五年度の遵義会議まで、毛沢東の党中央における権力は留ソ派によって抑え込まれることとなった。しかし、延安では整風運動を發動、用済みでなおかつ（中国革命の）邪魔になった王明ら留ソ派を追い落とすのである。⁽²²⁾

ちなみに、A B団の「A B」が何を指すかについては二説ある。一般には中共の説をとり、中国でも日本でも

「アンチ・ボルシェビキ団」のこととされ、東京堂の『中国現代文学事典』なども含め、日本の事典類もみなこれをとる。戴向青らも『A B 団与富田事変始末』で、この名の由来について、やはり、元A B 団構成員の後の証言を引いて、これが「アンチ・ボルシェビキ」の略語だったことをかなり詳しく記している。しかし、鄭学稼は、前掲書で一九三三年十二月、元A B 団指導者の一人、王礼錫（のちに上海神州国光社の編集者や文協作家戦地訪問団団長となる人物である）が、『読書雜誌』第二卷第十一・十二期合併号で、日本人佐藤貞一の手紙に言及した際の言葉として「A B 団について言えば五年前のある種の政治組織にすぎず、それもほんの数人の小グループでした。A B 団といったのは、もともと二重の組織があったからにすぎないことで、何かの略称というわけではなく、のちに、すぐ解散しました。もし、今もA B 団があるのなら、おそらく、死者が復活した奇跡でしょう」と引いている（前掲書第五頁。この件については福本著『中国革命への挽歌』六七頁も参照のこと）。つまり、「アンチ・ボルシェビキ」というのは、中共の作った「神話」「伝説」の類だと言いたいのである。ただ、鄭学稼の言は時に信頼性に問題があるので、『読書雜誌』当該号を確かめないといけないのだが、日本にはこの号を所蔵している機関がないようである。また、鄭の引用が正しいとしても、戴の引く複数の元A B 団員の証言と食い違うので、にわか結論は出せない。ただ、鄭の引く王礼錫証言は資料的には少数派であるとは言える。

さて、富田事変の上海在住の鲁迅への伝播経路についてはなお、考証の必要があるのだが、当時すでに中共が組織した左連が成立しており（一九三〇年三月に成立大会、鲁迅はその常務委員であった）また、個人的にも鲁迅の周囲には柔石、馮雪峰らの共産党員がいた。常識的に考えても鲁迅が富田事変を知っていたことは異とするに足らないだろう。

柔石は増田が上海に渡る直前の一九三一年一月に、当時の中共江蘇省委員会で留ソ派との熾烈な党内闘争に参与するなか、密告によって、王明グループに反対する他の多くの黨員たちとともに逮捕され、国民党によって処刑された。魯迅とは一九二八年から交流があり、魯迅の深い信頼を得た青年であった。柔石らの死を悼む魯迅の文章「忘却のための記念」（『南腔北調集』所収）は胸を打つものがある。柔石は左連の執行委員や常務委員、編集部主任などの任にあたっているが、『魯迅全集』の「柔石小伝」（『二心集』所収）注によれば、中共入党は一九三〇年五月、「柔石小伝」本文によれば、ちょうどこの時期、柔石は上海で開かれた「ソヴェト区域代表大会」に参加したといい、また一説には、一九三一年秋に瑞金で開催予定の全国ソヴェト代表大会に出席する準備をしていたともいう⁽²³⁾。また、上記のように、柔石は党内闘争に深く関わっていた。前年後半からの江西ソヴェト地区でのA B団粛清運動について、まったく知らないということは考えにくいのではないか。

一方の馮雪峰は柔石よりも早く、一九二七年に中共入党。柔石の紹介で魯迅と知り合い、左連成立後、一九三一年二月には左連の共産党団書記に就任している。一九三一年九月には、上海の中共中央と瑞金のソヴェト区中央局との間には無線通信が開通したという⁽²⁴⁾。後に、一九三三年末に自らも瑞金入りすることなども考え合わせると、馮雪峰もやはり、ソヴェト区でのA B団粛清について、詳細はともかく、ある程度は知っていたと考えられるのではないか。魯迅が「人をやって調査し……」云々と言うとき、頭にあったのはあるいは馮雪峰だったのかも知れない。

また、今回は、当時の上海のメディア（国民党、共産党、一般商業紙誌をふくめ）を調査する余裕がなかったが、あるいはそうしたメディアにも断片的であれ、報道があった可能性もある。これは今後の課題とするが、いずれにせよ、今日では一部誤りだったと中共自身も認めるソヴェト区での「粛清運動」＝農民（同志）殺しの情報は魯

迅の耳に届いていたわけである。

それにしてもこの時期、李立三の中央に反対する中共江蘇省委の独立事件やそれに続く内部闘争での王明ら留ソ派によるソ連・スターリンの權威を借りた党内指導権の確立、また、その過程での柔石ら左連五烈士を含む反留ソ派の国民党による逮捕銃殺と王明指導部の不可解な対応等々、中共の党内事情は、魯迅ら党外人士も巻き込みながら（左連は江蘇省委の指導下にあった）、複雑な様相を見せていた。富田事変はそうした党内の混乱状態、国民党軍の圍剿攻撃という極限状況の中で生じたわけである。

3. 魯迅の反応が意味すること

さて、増田は冒頭の引用部で「農民を殺すのはたとどんなことからであろうとよくない、……中共に殺しちゃういけないと忠告することを決心した」という魯迅の言葉に、「ヒューマニストと云われる彼の真面目を見たように思った。何か熱情的な態度であった」とするが、確かにここからは、魯迅の共産党ひいては毛沢東に対する違和感、危惧の念をすで見取ることができであろう。増田との会話時点でソヴィエト地区での肅清発動者が毛沢東であったことを、魯迅が知っていたかどうかは確言できないが、一九三二年十一月の中華ソヴィエト臨時中央政府主席に毛沢東が就任したのは知っていたはずで、少なくともその時点で、「農民を殺している」中共の最終的責任者が名目上、毛沢東であることは認識していたに違いない（毛沢東の軍事的実権がこのときには失われていたとしても）。

この富田事変に対する魯迅の反応は、晩年の魯迅の中国共産党やソ連共産党、スターリンなどに対する反応とや

はり通底しており、増田の記述の信憑性もそれによって、さらに補強されるものと筆者は考える。この引用部を含む一段に出てくる魯迅の「同伴者」という自己規定も、すでに筆者は何度か引用しているが、当時の魯迅の自己認識として重要な言葉であろう。そしてこの直前で、増田は魯迅のこんな言葉も引いていたのである。

「僕もこんなプチ・ブルみたいな生活をしているが、自分じゃけっして面白くありません、こんなような生活をする自分を思うと腑甲斐なく思いますよ」

「僕を攻撃する批評家たちが云います、魯迅は本当の革命家ではないって、なぜなら、本当の革命家ならと「つ」くに殺されている筈だ。まだ生き残ってつべこべ云っているそのことが革命家じゃない証拠だって。それは実際です。僕たちが清朝に対して革命運動をやり出して以来、僕の友人は大に殺され、生き残っているものは少いですよ」（ミリオン・ブックス版、六四頁）

もちろん好き好んで同伴者を自称する元革命家はそうないので、魯迅も聊か自嘲気味である。革命の側から客観的に見れば自分は「同伴者」だと元革命家魯迅は冷徹な目で自己規定しているのである。⁽²⁶⁾

さて、「農民を殺す」共産党に対する危惧を持った、清朝打倒を目指したこともある元革命家にして現（当時）同伴者魯迅は、その後、毛沢東を含めた中共やソ連のスターリン（体制）などに対して、その危惧をどう表現していたのであろうか。以前に筆者が触れたことも含め、そうした魯迅の言説をいくつかここでも見ておきたい。増田の証言と考え合わせるとまた違う陰影や様相が見えてくるからである。

危惧の要所は「共産党は人を殺す」ということにある。

(1) 増田の紹介する「上海文芸の一瞥」の革命文学者批判

「上海文芸の一瞥」(『二心集』所収)は一九三一年七月二十七日及び八月三日付上海「文芸新聞」第二〇期、第二期に発表された、同年七月二十日の社会科学研究会での講演である。増田は『魯迅の印象』で、魯迅がこの講演で一九二〇年代末の「革命文学者」を批判した部分を引き、魯迅にとって「強者」の立場で「弱者」に向かって吐かれる尤もらしいお喋りが真に「我慢ならない」ものであったことを説明する。

「成傲吾先生は」「革命というものは非常に怖るべきものだということを一般の人に知らせて、一種の極左的な凶悪な顔つきでもって、まるで革命が一度びやってくれば、一切の非革命者は直ちにみな殺されるかの如く、人をして革命に対してただただ恐怖を抱かせるものとした」と「上海文芸の一瞥」で彼「魯迅」は当時の代表的な革命文学者等を批判しているが、このような革命文学者の面つきが彼には我慢ならなかったようだ。彼はだから云っている。「実は革命とは決して人を殺すものではなく、人を活かすものなのだ」と、そして「このような、人には『革命の恐ろしさを知らせ』そうして自分は痛快がろうとする態度は、どうも才子プラスごろつきの毒に中てられているのだ」と。(ミリオン・ブックス版、六九〜七〇頁)

「上海文芸の一瞥」の講演がなされた時期は、魯迅が増田に「付近の農民たちを共産党が殺しているという噂がある」と語った時期と重なる。この講演にも、富田事変前後の事情が影響している、あるいは逆に魯迅のこういう見方が富田事変に対する反応と照応していると考えられよう。

(2) 魯迅、馮雪峰をからかう。「君たちがやってきたら、まず私を殺すんじゃないか」

一九八一年版『魯迅全集』の注釈作業の副産物と言える、朱正責任編輯『魯迅研究百題』（湖南人民出版社、一九八一年）所収の陳瓊芝の文章「為什麼魯迅沒有加入中國共產黨？」（魯迅はなぜ共産党に入らなかったのか）に、李霽野の言葉が紹介されている。著者陳瓊芝の文章をそのまま引く。⁽²⁶⁾

「私は李霽野同志がこんなことを話すのを聞いたことがある。一九三六年のこと、李霽野同志が英国から帰国し、上海に魯迅を訪ねた際、馮雪峰のことが話題になると、魯迅が言うことには、馮雪峰が革命情勢を説明するのを聞いて、彼をからかって「君たちがやってきたら、まず私を殺すんじゃないか」と言ってみると、馮雪峰はしきりに手を振り、真顔で「ありえませんが、そんなことは決してありません」と答えたというのである。魯迅の本意は李霽野に、馮雪峰という人間がいかに真面目かということを伝えるところにある。しかし、この冗談のうちに、革命を損なう左の誤まりに対する魯迅の秘かな憂慮がふくまれているのではないか。もしそうだとすれば、後に、革命闘争のために命をかけてきた多くの同志が、「文化大革命」中、迫害の憂き目に遭ったことは、まさしく魯迅の驚くべき、洞察力と予見性を証明してはいないだろうか。」（五六二―五六三頁）

陳瓊芝は、「左の誤まり」に対する魯迅の憂慮とは、一九三〇年代前半の王明路線や文革時の毛沢東路線に及ぶものとするようだが、増田の紹介する一九三一年の魯迅の言が富田事変前後の経緯を踏まえているとすれば、すでにこの時点で毛沢東を含めた共産党の反人道的側面（全面ではない！）についての危惧を表していたものと見なさざるを得ない。

(3) 魯迅、ソ連への病氣療養行きを断る

晩年の魯迅はまたスターリンの肅清に対しても危惧を覚えていたのは間違いない。魯迅の病氣療養のために、内山完造や須藤五百三たちは日本行きを勧めたことがあり、魯迅も半ばその気になっていたが、病状が重くなつて実現しなかつたらしい。⁽²⁷⁾ また、増田自身も一九三一年の上海滞在中、実現しなかつたものの、九州帝大への赴任を魯迅に仲介したことがあり、魯迅は一年程度なら行つてもいいという意向を示したとも言う。⁽²⁸⁾

一方、モスクワの中共駐コミンテルン代表団(王明ら)からの病氣療養のための公式招待は断っている。旧拙稿から二段引く(「」内は本稿での引用にあつての補足。一部誤記などは訂正した)。

「この辺の事情「魯迅がソ連での療養を断つたこと」はすでに胡愈之自身が『魯迅研究資料』1(魯迅研究資料編集部編、爾雅出版社、一九七九年、三月刊「なお、この二人のインタビューは一九七二年、二人の校閲は一九七五年、つまりともに文革中のことである」)所載の「馮雪峰・胡愈之」「談有關魯迅の一些事情「魯迅に關するいくつかの事柄について」」の中の「三、一九三六年二、三月魯迅沒有接受去蘇聯休養的情況「魯迅がソ連に療養に行くのを断つた狀況」でくわしく述べている。魯迅が行きたくないと言つた理由は、ソ連に行けば文章が書けなくなるし、蔣介石反動政府とも闘えなくなる、等々であつたといふことだが、金城はここで「金城は新中国では主に中央統線部で活動した人物、「ここで」というのは胡愈之を偲んだ文章「党的堅強戰士」のこと」、こんなことを付け加えている。「それ以外にも魯迅は新聞でスターリンが反対派肅清を拡大しているということを知つており、そうした時にソ連に行くのはやはり不都合(不合適)だったのである。」⁽²⁹⁾

そして筆者は、金城の言う「不都合」の意味がいささか微妙なので、その可能性の一つとして以下のような解釈を記した。

「国防文学論戦」とも絡んで魯迅は周揚らからトロツキスト呼ばわりされるような状況がこの前後に現出するが、その魯迅がソ連に行った場合、自らも肅清の危険に晒されることを恐れたとは考えられないだろうか……「一九三五年のジノヴィエフ、カーメネフ逮捕」「翌年処刑」に象徴的な血の肅清の拡大化が、訪ソすれば自らに及びかねないと、彼は危惧を抱いたのかもしれない⁽³⁰⁾と。

後に敵家炎によって胡愈之の上記インタビュー「一九三六年二月、三月魯迅没有接受去蘇聯休養的情況」は、『魯迅研究資料』1収録に当たって一部削除されており、その部分には実は以下のような、魯迅の肉声を伝える胡愈之の言葉と、これに対する胡愈之自身の解釈があったことが明らかにされた。

「それから魯迅はまたこう言いました。「ソ連の国内情況はどうですか。私はどうもちょっと心配です。やはり、自陣内部で問題が起きているではありませんか。」と。魯迅が言っているのは、当時スターリンが肅清を拡大しており、西側の新聞・雑誌がこれを大々的に宣伝していたため、魯迅はちょっと心配だったのである。これも魯迅がソ連に行くこうとしなかった原因の一つである」⁽³¹⁾

これに増田の記述を考え合わせると、筆者の二十年前の旧稿での推論は一層補強されるはずである。さらに付言すれば、2で触れた愛弟子柔石の国民党による逮捕・銃殺が、王明らの密告によるとの噂が魯迅の耳に入っていた

として、その上で自分をソ連に招待しようとしているモスクワの駐コミンテルン中共代表が当の王明であることを知っていたとしたなら（その蓋然性は頗る高い）、魯迅は初めからソ連に行く気はなかったと考える方が自然であろう。他のことも含め、魯迅の王明⇨スターリン系統への忌避、警戒感はかなり強かったのではないか。もちろんそれは、親トロツキーにも、反毛沢東にも直接結びつくものではないが。

(4) 革命が来て、それでも命があつたら上海の道路掃除でもやりましょう

一九三四年四月三日付、魯迅の曹聚仁宛書信も一面で上記のような危惧と軌を一にするものであろう。曰く、「破滅するときにきて、それでも命があるなら、赤いチョッキをもらつて、上海の道路掃除でもやりましょう」と。「破滅」の原語は「崩潰」。つまり旧社会の崩壊⇨革命のことである。「赤いチョッキ」は道路清掃人の作業着³²⁾。言わんとするのは、魯迅は共産党政権のもとでは、命がないか、改造対象になるだろうという自覚である。ただ、こうした魯迅の「自覚」は、以前にも論じたとおり、反共産党、反社会主義には直結しない。むしろ、これは自分が古い社会から来た人間であるという魯迅の深い「自覚」と、新社会が来たとして、そこで自分に待ち受ける過酷な現実に対する「覚悟」なのである。一九二〇年代後期からの魯迅のソ連の同伴者作家に対する度重なる言及や同伴者という自己規定を忘れてはならない。

同時に、G・ベントンが言うごとく、「魯迅は一九三〇年代中葉の政治状況の中で世界で唯一の進歩的勢力を代表すると映ったスターリニズム及び中共と決別しようとはしなかったし、することもできなかった³³⁾」のである。

その評価については、池田浩士が『ルカーチとこの時代』³⁴⁾で述べた次のような一節に尽きる。

反ファシズム闘争の正当性は、もちろん（粛清）によって失われた生命、踏みにじられた人間存在にたいして目をつぶることを正当化しない。しかし一方、（粛清）が反ファシズム闘争と同一の場で行われたということ、反ファシストにとつての社会主義ソ連、この地球の六分の一をまもることがぜひとも必要と考えられているたということ——これを度外視した（粛清）観は、重層的な現実そのものを貧しくすることにしかならないだらう。（粛清）を正当化すべきだ、というのではない。（反スターリン主義）を嘲笑すべきだ、というのではない。そのなかで現実生きていたものたちが、（粛清）と（反スターリン主義）にたいしてどのような態度をとり、どのような言葉を発していたかを見さだめることから、あらためて出発しなければならない……

魯迅はこうして、左聯五烈士らを密告したと噂された王明のみならず、富田事変前後に多数の農民、知識人党員を殺した毛沢東を含む中国共産党、そして仲間殺しを究極まで押し進めつつあったスターリンとソ連共産党に対する危惧を持ち続けつつ、一九三六年十月十九日、死を迎えたのであるが、その棺は「民族魂」という、国際主義者にして階級論者であった魯迅が最も嫌うであろう旗幟で覆われたのである。「反蔣抗日」から「逼蔣抗日」に路線転換中の中国共産党は、胡風、蕭軍ら魯迅の愛弟子の抵抗を抑え、抗日愛国人士を担ぎ出し、魯迅の葬儀を最大限政治的に利用したのであった。⁽²⁸⁾

(5) 増田証言の魯迅研究における意義

さて増田証言や、上記（1）～（4）のような魯迅の言葉は魯迅研究の上で、どのような作用を持ちうるか、最後にいささか考えておきたい。

容易に想像しうることだが、毛沢東、中国共産党によって作り上げられた革命家魯迅、共産党に寄り添う魯迅といった形象の一面性はこれによってより明らかになる。同時にそれは魯迅と中共との関係をめぐる具体的（些末）な論争点の解決にも資するであろう。

たとえば魯迅は、紅軍指導者で建国後は大将にまで昇進し、人民解放軍副參謀長や国防次官を歴任することになる陳庚と上海で一九三二年末から三三年初めの時期に会見しているが、その正確な時期と会見回数（一度か二度か）が確定できていない⁽³⁶⁾。また魯迅の会見意図は特に問題とされず、ソヴェエト区に対する魯迅の好意的関心に発するものと漠然と解釈されているにすぎないようだ。しかし、増田証言を踏まえれば、魯迅は「共産党が農民を殺すのをやめさせよう」として、あるいは単にソヴェエト区の実情を知ろうとしただけではなく、むしろ負の側面も知ろうとして陳庚に会おうとしたという可能性も排除できないのではないか。陳庚は一九三二年夏から秋にかけての時期、鄂豫皖ソヴェエト区での戦闘中負傷して、上海に治療に行き、馮雪峰の仲介で魯迅を会見するわけだが、このときの陳の地位は紅四軍第十二師師長である⁽³⁷⁾。そして当時、鄂豫皖ソヴェエト区革命軍事委員会主席の座にあつて苛烈な肅清を行っていたのが張国燾であつた。福本勝清によれば、張国燾による当地での肅清は「自分に忠誠を誓う者以外の幹部を殺し尽くしたといつてよい」もので、「徹底的にインテリ出身者を肅清したため、文書を書ける者がいなくなり、大会が開けなかつたり、ちよつとした小部隊の帳簿つけさえままならない」状況が起きていた⁽³⁸⁾という。江西ソヴェエト区での肅清を聞きつけていた魯迅は鄂豫皖ソヴェエト区での動きも察知していたと考えてもあながち無理とまでは言えない。

また、魯迅が茅盾と連名で紅軍の長征勝利を祝う電報を中共中央に送ったかどうか、さらにそれが魯迅のものと言えるかどうかという未決着の論争がある⁽³⁹⁾。類似のものとして、魯迅が延安にハムを送ったかどうかという問

題もある。⁽⁴⁰⁾ これらのことも、たとえ結論がどう落ち着こうと、増田証言や一連の共産党のスターリン主義的体質に対する魯迅の批判的言説を考慮しながら考証しなければならないはずである。留保条件なしの毛沢東、中共礼賛の根拠となるとは限らないのである。

ふと見過ごされてきた増田渉の証言は、魯迅の「ヒューマニストと云われる真面目」を今一度私たちに気づかせてくれるばかりでなく、魯迅を毛沢東、スターリンニズムの陥穽から救う手がかりを提供してくれるという意味でも貴重なものと言えるのであろう。

注

(一) 『魯迅の印象』（講談社、ミリオン・ブックス、一九五六年）、六六～六七頁。同書角川選書版（一九七〇年）では六一～六二頁。角川版著者「序」が言うとおり、両テキストの間には若干の異同がある。特にこの部分では、角川版では「何か熱情的な態度であった。」の一文が削除されている。ここではミリオン・ブックス版により、旧漢字、旧仮名遣いは新字体、新仮名遣いに改めた。以下引用は基本的にこれに従う。なお、同書初版は講談社から一九四八年に単行本として出版された。初版とミリオン・ブックス版の間にも若干の異同があるが、この引用部分で言うと、初版では「中共の根拠は」、「瑞金に対しては所謂剿匪攻撃が行なわれているように聞いている」（「国民党政府軍によつて」の一句は初版にはない）とそれぞれなっているが、ミリオン・ブックス版は初版から時期的にもそう離れておらず、誤字誤植等の最低限の修正に止めており、テキストとして信頼性が高い印象を受けるので、本稿では初版ではなく、このミリオン・ブックス版テキストによることとした。「何か熱情的な態度であった。」の部分は初版にもある。なお、『魯迅の印象』の初出は中国文学研究会の雑誌『中国文学』第九十九号（第百二号）昭和二十二年九月号（十二

月号)である。初版自序に曰く、「『魯迅の印象』は「実」は雑誌『中国文学』に昨年、『魯迅雑記』として連載したものに、いまま少の訂正と補足を加えたものである」と。今、この引用部分を初出と校合すると、初版との異同はない。ついでながら、この部分、中国語版の鐘敬文著／訳『尋找魯迅・魯迅印象』(北京出版社、二〇〇二年)では三二九頁。本書は二部構成で後半の「魯迅印象」が増田のミリオン・ブックス版の翻訳である。

(2)『魯迅の印象』「跋」、ミリオン・ブックス版、二一八頁。ちなみに、学研版『魯迅全集』第十九卷「人物注」によれば、鹿地亘が上海に行ったのは、一九三六年一月。瞿秋白編『魯迅雜感選集』の日本語翻訳にあたり、二月から魯迅の教えを受けた。同全集第二十卷、「魯迅日記」一九三六年二月の訳注参照。なお、詳細は丸山昇著「魯迅と鹿地亘」(丸山著『魯迅・文学・歴史』汲古書院、二〇〇四年、所収)参照。

(3)参考文献は以下の通り。「増田渉先生略歴」(『啞』第八号、一九七七年。ここでは前掲注2の中国語版鐘敬文著／訳『尋找魯迅・魯迅印象』所収の中国語訳による)。「現代人名情報事典」(平凡社、一九八七年)。角川版『魯迅の印象』奥付の著者略歴。学研版『魯迅全集』第十九卷人物注。藤井省三著『魯迅事典』(三省堂、二〇〇二年)。藤井省三著「佐藤春夫と岩波文庫『魯迅選集』」(『アジア遊学』二五号、二〇〇一年)。長堀祐造著「上海内山書店と魯迅をめぐる風景」(『ピブロス』一九九二年九月号、国立国会図書館刊)。伊藤漱平・中島利郎編『魯迅・増田渉師弟答問集』(汲古書院、一九八六年)所収の松枝茂夫著「序」、中島利郎著「解説」、伊藤漱平著「跋」。なお、『魯迅・増田渉師弟答問集』関連資料の発掘を紹介したものとしては孫立川著『魯迅研究抉微』(鷺江出版社、厦門、一九八八年、楼適夷序)所収の一連の文章がある。また、増田の改造社時代の高杉一郎との交友に関しては最近出た太田哲男著『若き高杉一郎』(未來社、二〇〇八年)にも記述がある。魯迅が増田訳サイレン社版『支那小説史略』を一九三五年に上海で会見した日大教授円谷弘に送ったことに関しては拙稿「円谷教授宛の魯迅署名本見つかる」(『中国図書』内山書店、一九九〇年一月号)参照のこと。そこでも書いたが、魯迅が国民党に処刑された瞿秋白のために編集し、内山書店を通じて印刷出版した翻訳遺稿集『海上述林』の二種の豪華本、天金・革背および天金・ビロード装(ともに背文字は金)はサイレン社版の『支那小説史』の装丁に魯迅自身が感激したこと発しているのではないか。上述の

中島利郎が引く、同書造本見本を増田から受け取った魯迅が感想を認めた増田宛一九三五年六月十日付書信は『支那小説史』ノゼイタクナ装釘ハ私ノ有生以来、著作ガ立派ナ着物ヲ着タ第一回ダラウ。私ハゼイタク本ヲ嗜ム。到底「つまるところ・結局の意——長堀注」プチ・ブルノ為メカ知ラ」とする（増田はミリオン・ブックス版一四六頁で、魯迅の手紙は漢字と片仮名で書かれていると、述べているので、ここでの表記は『魯迅全集』ではなく中島の引用文に従う）。さらに付言すれば、ここからも魯迅が自身のことを「同伴者作家」プチ・ブルなどと増田に語った（魯迅の印象）ミリオン・ブックス版、六七頁、六四頁）「自己規定」の位相が見えてくる。シニカルな自己韜晦とも見えるが、これは魯迅が自己を客観的に見ることができたということであって、本音ではない、と一概に否定することはできない。

(4) この芥川書簡の引用は岩波版テクストそのままとし、現代表記には改めなかった。なお、『芥川全集』同巻の注によれば、「涓塘奇遇記」は芥川作品「奇遇」（『中央公論』一九二二年四月）の出典とのこと。なお、増田渉は「佐藤春夫と魯迅」（角川版『魯迅の印象』「魯迅雑記」の章に収録、二六六―二六七頁）で、「私はあるとき芥川氏に、氏が中国のことをあつかった小説の素材について、問い合わせの手紙を出した。『秋山図』の種本はこれこれでしょう」と言い、「奇遇」は何から採ったものですか、というようなことを書いたと思う。すると氏は巻紙に書いた長文の返事を書いて、田舎高校生の私を大へん感激させた。このことも私をやがて中国文学の勉強に向かわせる有力な原因になったように思う」と書いている。『啞』第八号の増田略歴の記述はこれによるものか。

(5) 岩波文庫『魯迅選集』（一九三五年）の増田の「あとがき」には上海行きと魯迅に師事することになった経緯が以下のように記されている。全文を掲げる。「数年前、余は支那に遊学せんとして先ず当時紀南下里町懸泉堂に養病中の佐藤春夫先生を尋ね別辞をのべた。其夜懸泉堂に一泊し臥床に入つてなお枕に凭りつつ深更まで談り、或は鞭撻されたり抱懐をのべたりした情景が今なお眼底にある。余は上海に着くや、佐藤先生からの添書を内山書店主に通じたところ、内山氏はかねて魯迅先生と親交があり、乃ち余を同先生に託した。かくしてその後毎日魯迅先生の寓を訪れて支那文学の講説をきくこと約一年間に及んだが、先生の代表的著作——従つてここに反訳した諸篇もみな当時先生か

ら訓釈を仰いだもの。「改行」いま佐藤先生と鄙名を連ねて魯迅先生の諸作を反訳するを得たことは甚だ荣幸に堪えないところで、而も余が多少支那の書を読むことを知り、支那の文化を愛することを教えられた実に年来両先生の提撕に倚るものが最も多い、此の機に聊か私情の一端を附記して感恩の微を致したい」（同書一七八頁）。

(6) 増田は『魯迅の印象』初版「自序」で、「回想小品集『朝花夕拾』、散文詩『野草』、或いは随筆集『熱風』『華蓋集』等についても、またところどころ字句の質疑をしつつ読んで行った。いまその当時の講解については、字句の邦訳のための若干のノートが残っている以外、大ていは忘れてしまったけれども……」と記している。この部分、ミリオン・ブックス版「序」では少し違う。以下のとおり。「回想小品集『朝花夕拾』、散文詩『野草』、あるいは短評隨筆集『熱風』、『華蓋集』及びその続編、『而已集』等についても、ところどころ字句の質疑をしながら読んで行った。いま当時の講解については、若干の書き入れのメモがのこっている外、大ていは忘れてしまったけれども……」。つまり、『而已集』も講解の対象だったわけである。以上、細かいことではあるが、これらのことは現在関西大学に残されている増田渉文庫を調査する際には大事な前提である。前掲注3の『魯迅・増田渉師弟答問集』未収録のメモや魯迅が講解する際に用いた本などに残されている可能性がある。おそらく魯迅作品の翻訳には増田渉文庫の調査は必須であろう。

(7) 本文後出の戴向青・羅惠蘭著『A B 団与富田事変始末』第十章「関于富田事变的定性及分歧」など参照。

(8) たとえば、前掲注7の『A B 団与富田事変始末』は「総前敵委「つまり毛沢東が責任を負う時期」と一九三一年以後の「王明の中央にも責任がある時期」ソヴィエト区中央局が中央ソヴィエト区で指導したA B 団肅清運動で数千数万人に上るいわゆるA B 団分子が逮捕殺害された」とする（同書二〇六頁、なお、中央ソヴィエト区には福建の閩西ソヴィエト区も入る）。さらに同書は最近まで健在だった著名な開明派の老將軍蕭克（一九〇七〜二〇〇八、一〇）の回想として、江西省黃陂におけるA B 団肅清で、一九三〇年十一月から十二月の二カ月だけで一三〇〇〜一四〇〇人が殺されたとしている（九六頁）。また本文後掲の福本著『中国革命の挽歌』も次のように記す。「旧江西省行政委員下の黨員は三〇年一〇月の時点で三万人いたが、三二年の夏には一万五千人に減っていたともいわれる。その減少のす

べてが肅清（処刑）されたとは限らないが、しかし、きわめて過酷な措置が採られたことは間違いない」と（同書七四頁）。このほか、時期は遅れるが、張国燾が四川で行った肅清もすさまじいものがあつた（福本の各著参照）。韓鋼著『中国共産党史の論争点』は、富田事変以後の中央ソヴェト区を含むソヴェト区全体でA B団として殺された者は七万人余りとする。本文後掲高華著『紅太陽是怎样昇起的』四九八頁、陳永發著『中国共産革命七十年』上巻の第三章第二節、及びユン・チアン著『マオ』一七三頁も参照。

- (9) 『中国共産党歴史』上巻の記述とは第一巻上冊四〇三頁にみられる。同書は中共中央党史出版社、二〇〇二年。「社会民主党」は実在しない政党だがここでは、富田事変後、閩西根拠地で「社会民主党」を实在組織として肅清が進められたことを指している。韓鋼はこの犠牲者を六千人余りとする（同書一〇頁）。「一部の人物」については特定できないが、たとえば、前期まで中共中央の政治局員だった曾慶紅の父、曾山は、A B団肅清、富田事変鎮圧の立役者の一人であつたことなどはヒントになろう（本文後出の戴向青著「論A B団和富田事変」や本文前出の中共中央組織部等編『中国共産党組織史資料』第二巻（下）など参照）。なお、韓鋼著日本語訳については、石川禎浩の鋭い書評がある（『中国研究月報』二〇〇九年一月号）。石川が触れる富田事変についての景玉川の論文「富田事変平反的目前後」（『百年潮』二〇〇〇年第一期）を初校に際して参照したが、「平反」実現に動いた人々の姿が描かれていて感動的ですからある。また、姚金果著「富田事変是怎样反革命事件的」（同上誌二〇〇八年第三期）も見たが、当該論文は駐上海のコミンテルン極東ビューローが富田事変を反革命と規定する過程を、ソ連崩壊後公開されたコミンテルンの中国革命関係のアルヒーフに基づいて紹介している。同時に富田事変の外部要因としてソ連における一九二〇年代末のスターリン・ブハリリン抗争と、スターリンによるブハリリンに対する「右派偏向」批判や二九年のブハリリン失脚（三四年復活するも、三七年逮捕、翌年銃殺）があると指摘していて興味深い。

- (11) 本文後掲戴向青著「論A B団和富田事変」による。現在の江西省吉安市青原区富田鎮。

- (12) たとえば、注23後掲の羅章竜口述・丘權政整理「上海東方飯店會議前後」もそうである。また、郭德宏著『日出東

方紅——中国共産党80年歷程紀実』（江西人民出版社、二〇〇一年）も、A B団、社会民主党肃清問題について触れ、「一九三〇年代後半から中央根拠地では複雑な闘争環境の中で、反革命肃清の拡大化という誤りが現れ、自白の強要や、そうした自白を証拠とするという手段をとって、革命に忠実な幹部と戦士を「A B団」「社会民主党」などとして殺害した。……敵と味方を混交すること甚だしく、多くの冤罪事件、捏造事件、誤審案件をもたらした」と正確に指摘するが、これは「中共臨時中央の「左」傾冒險主義」が「紅軍と革命根拠地にまで実行された」ためと、やはり王明らに責任を負わせている（同書一〇四頁）。注9前掲の『中国共産党歴史』上巻の記述も基本的に同様な観点からなされている。

(13) 韓鋼著九頁による。戴氏の肩書きは、注7の著書の著者紹介によるもので、一九九六年当時。

(14) 本書の信頼性については、矢吹晋著『激辛書評で知る中国の政治・経済の虚実』（日経BP、二〇〇七年）の書評を参照。本書の歴史事実の記述には疑問が多い。さらにG・ベントン、林春編『傳記還是杜撰？』（香港大風出版社、二〇〇八年）も参照のこと。

(15) 近藤邦康著『毛沢東』（岩波書店、二〇〇三年、七九頁）、野村浩一著『現代アジアの肖像2 蔣介石と毛沢東』（岩波書店、一九九七年、二〇九頁）も簡単に触れている。

(16) 鄭学稼評価については『魯迅研究月刊』二〇〇五年第四期掲載の古遠清論文参照。

(17) この時期の毛沢東の党内、紅軍における地位は本文前掲の『中国共産党組織史資料』第二巻（下）の第四編「中国工農紅軍主力部隊」第一章「中国工農紅軍第一方面軍及其前身（一九二七、八―一九三七、八）」で確認できるが紅軍組織の頻繁な改編のため些か複雑である。主たるところは以下のとおり。一九三〇年二月―六月・紅四軍共同前敵委員会（総前委、紅五、六軍、その他の根拠地工作も担当）書記。同年六月―八月・紅軍第一軍団政治委員、前敵委員会書記、一九三〇年八月―一九三一年十一月・紅軍第一方面軍総政治委員。一九三〇年八月―一九三一年一月・同総前委書記。同年五月―十一月・同方面軍臨時総前委書記。また、この時期の毛沢東の動静については、中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』（二八九三―一九四九）上巻（人民出版社、中央文献出版社、一九九三年）の一九三〇年の

- 部分が詳しい。富田事変に至る時期及び事変当時の中共の党内情勢、国民党による圍剿攻撃への対応などがよくわかる。『年譜』はさらに、同年十二月上旬の項で、富田事変の経緯を簡単に叙述し、李詔九の責任を暗に指摘しつつ、「これが反革命肅清拡大が引き起こした重大な誤りを有する『富田事変』である」とし、事変の主導者たちによる反毛沢東行動を非難している。（三二七～三二八頁）
- (18) 陳永發著『中国共産革命七十年』上巻、Gregor Benton, *Mountain Fires*, Univ. California Press, 1992, p. 39, pp. 71-72 及び Frederick C. Teiwes, *Politics and Purges in China*, M. E. Sharpe, 1993, pp. 48-49 を参照のこと。同様の見方が書かれている。
- (19) ただ、毛沢東が個人的利害や残酷な性格から過酷な肅清をしたと単純に説明するユン・チアンの見方では歴史はわからないだろう。上述のように、土地政策や都市と農村の優先度など、中共中央との路線対立、中国革命の路線をめぐる問題が江西地方党勢力との軋轢となり、権力闘争に発展していたという複雑な面も見逃せないし、また、後に毛沢東はこの時期の肅清を反省しているようだが（後掲注22参照）、未熟な党が強大な国民党の軍事力の前で陥るべくして陥った弱点がここに表れていると見ることもできる。こうした反省が早い時期に公式な総括として公表されていたら、ポル・ポト政権による自国民の大量虐殺や連合赤軍の同志殺しは、あるいは回避のチャンスがあったのかも知れないと、ふと思われもする。
- (20) 『中国共産党外伝』一五六～一五七頁。さらに福本著『中国革命への挽歌』第二章「悲劇のコミュニオン」は富田事変前後の中共、毛沢東の動きを詳しく紹介していて参考になる。
- (21) 福本著『中国革命への挽歌』第八八頁。なお、牛漢が雑誌『読書』（一九九八年第九期）掲載の座談会「人間魯迅」で言及する、馮雪峰、瞿秋白が無聊をかこつ毛沢東と文学談義を交わし、魯迅の重要性を毛に教えたというのはこの時期のこと。牛漢は、文革中の馮雪峰の言として毛沢東が実権を持っていなかった時期の様子を以下のように記す。「長征以前「長征は一九三四年秋以降——長堀注」の瑞金で、瞿秋白は当時人民教育委員、馮雪峰が党校校長で、毛沢東はまったく権力を持っていなかった。三人はほとんど毎日顔を合わせては老酒ラオヤウを飲み、憂さを晴らしていた」と。

姚守中他編『瞿秋白年譜長編』（江蘇人民出版社、一九九三年）によれば、瞿秋白の瑞金入りは一九三四年二月、香港脱出を図って国民党に福建長汀で逮捕されたのが一九三五年二月、処刑されるのが同年六月。陳早春・万家驥著『馮雪峰評伝』（人民文学出版社、二〇〇三年）によれば、馮雪峰は一九三三年末、上海から瑞金に行き、中央党校の副校長となり、一九三四年十月には長征に参加している。したがって、牛漢の紹介する馮雪峰の言は一九三四年春から秋の長征開始前の時期についてのことと考えられる。

(22)

「ここで公正を期すため毛沢東の後年の反省の弁とその後の具体的施策、さらにこの時期のソヴィエト区での粛清の責任の所在を確認しておこう。まず毛沢東の反省の弁を戴著から拾う。一九四五年五月、中共第七回大会で毛沢東はこう述べている。「反革命粛清では極めてつらい道歩んだ。……反革命には反対しなければならぬが、党がまだ未成熟なときに、多くの人を誤って粛清してしまった。……私自身もその「誤りを犯した」中に含まれる」（『在中共産党第七次全国代表大会上の結論』、『毛沢東文集』第三卷、人民出版社、一九九六年、四〇八頁。戴著一六二頁）と。さらに一九五六年九月の中共第八回大会予備会議第二回全体会議では「私は誤りを犯した」「反革命粛清のとき、私は誤りを犯してしまった。最初の粛清では誤って人を粛清してしまった」（『關於第八屆中央委員會的選舉問題』、『毛沢東文集』第七卷、人民出版社、一九九九年、一〇六頁。戴著一六六頁）と語っている。これについて鄧小平はこう評価している。「紅軍時代中央革命根拠地でA B団をやつつけたが、やつつけた方の人たちはみな品性の劣る人だったのであろうか。やつつけ始めたとき、毛沢東同志も参加していたが、毛沢東同志は他の者たちよりも気づくのが早く、問題をすばやく発見して経験を総括し、延安に着いたときには「一人として殺さず、多くは逮捕せず」という方針を提起した」（『対起草』『關於建國以來黨的若干歷史問題的決議』的意見）、『鄧小平文選（一九七五—一九八二年）』、人民出版社、一九八三年、二六五頁。戴著一六二頁）と。さて、福本著『中国革命への挽歌』によれば、ソヴィエト区における粛清は一九三〇年から一九三七年まで続いたとされるが（七五頁）、本文でも触れたとおり、毛沢東の根拠地における権力は中華ソヴィエト共和国臨時政府主席就任後は留ソ派にそがれ、それ以降の各ソヴィエト区における粛清はそれぞれの地区の責任者、たとえば、張国燾や夏曦らとそれを後押しした王明らの留ソ派党中央が

基本的に負うべきであろう（七六頁）。なお王明自身は一九三二年十月以降はモスクワに赴き、秦邦憲（博古）が後事を托されている。

- (23) この辺りのことは、竹内実著『魯迅周辺』（田畑書店、一九八一年）所収「魯迅と柔石」も参照のこと。また、竹内がここで紹介している、一九三二年に湖北のソヴェト区で見た肅清を機に左連を脱退する楊邨人が書いた『読書雑誌』（第三卷第一号、一九三二年十一月執筆）掲載の転向声明は、この時期のA B団肅清を含む反革命肅清の苛烈さを物語るものとも言える。竹内は「かれ「楊」が転向を決意したのはソヴェト地区で反革命組織が摘発され、千人二千人という逮捕者を出したのを目撃して同情を禁じえなかったのが一因になっている。かれらからみれば、逮捕された連中は富農路線を主張したにすぎず、地主・富農出身であることによつて階級闘争の対象となつたのであるという」（九六～九七頁）と書く。なお、柔石らの逮捕のきっかけとなつた密告については、李海文「東方旅社事件」（『魯迅研究月刊』一九九七年第三期）、羅章竜口述・丘権政整理「上海東方飯店会議前後」（『新文学史料』一九八一年第一期）参照。さらに王凡西著『双山回憶録』（ここでは香港士林図書館服務社、一九九四年、増訂本、二〇〇頁。矢吹晋訳『中国トロツキスト回憶録』柘植書房、一九七九年、では一四八頁）には、当時からこの密告が王明たちによるものとの噂があつたとある。

- (24) 福本著『中国革命への挽歌』九一～九二頁。

- (25) 魯迅の同伴者認識と自己規定については、以下の拙稿を参照いただきたい。「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文芸理論」（『日本中国学会報』第四十集、一九八八年十月）、「魯迅『豎琴』前記」の材源及びその他（桜美林大学『中国文学論叢』第十六号、一九九一年三月）、「永久革命者の悲哀——もし魯迅が生きていたら」論争覚書——上」（『中国文学研究』第三期、早稲田大学中国文学会、二〇〇五年十二月）、同「下」（『日吉紀要言語文化コミュニケーション』No.36、二〇〇六年三月）。ただ、歴史的、客観的に見て、魯迅が「戦士」や「革命人」であり続けたという見方が成り立ち得ることは、本注最初の拙稿でも書いたとおり。情況がそれを強いたのであるが、魯迅は同伴者という自己規定のまま、確かにその死まで戦い続けたと言える。

- (26) 前掲拙稿「永久革命者の悲哀——もし魯迅が生きていたら」論争覚書——」上下、参照。朱正、錢理群らもこの論に言及している。
- (27) 増田渉『魯迅の印象』所収「魯迅と日本」。初版、一五二頁、ミリオンのブックス版、一四一―一四二頁、角川選書版、一四一―一四二頁。なお、このことは内山完造著『上海霧語』（大日本雄弁会講談社、一九四二年初版）所収「魯迅追憶」も紹介しているし（一三―一四頁）、佐藤春夫も魯迅逝去直後の新聞記事「魯迅の横顔」、「魯迅を追悼して」などでこのことになれている。『佐藤春夫全集』第35巻、臨川書店、二〇〇一年、所収。
- (28) 初版、一五一頁、ミリオンのブックス版、角川版ではそれぞれ一四〇頁。
- (29) 拙稿「胡愈之についての二三のこと」〔療原〕No.35、一九八九年）から引用。なお、この問題については注25の拙稿「永久革命者の悲哀」下の注34も参照のこと。
- (30) 注29に同じ。
- (31) 巖家炎著「東西方現代化的不同模式和魯迅思想的超越」〔『東方文化』二〇〇二年第二期所載、邦訳は日原きよみ訳「現代化モデルにおける東西の差異と魯迅思想の超越」〕〔中国研究月報〕No.63、二〇〇二年七月号。また前掲注25の拙稿「永久革命者の悲哀」下の注34も参照のこと。
- (32) 拙稿「永久革命者の悲」上の二の（五）参照。本稿のこの一段は基本的に旧拙稿当該部分による。
- (33) G. Berton *Yu Xun, Leon Trotsky, and the Chinese Trotskyists* (East Asian History No. 7, June 1994, Institute of Advanced Studies Australia National Univ.
- (34) 平凡社選書、一九七五年、一九四頁。
- (35) 王彬彬著「一九三六年的救国会と民族魂」〔鐘山〕双月刊二〇〇七年第四期）参照。この件についてはいざれまた論ずることとしたい。
- (36) 王錫榮著『魯迅生平疑案』上海辭書出版社、二〇〇二年、所収「魯迅与陳庚見過幾次面」参照。
- (37) 本文前掲の『中国共産党組織史資料』第二卷（下）二四二―二四三頁によれば、その在任期間は一九三一年十一月―一九

三二年八月のこと。

(38) 前掲福本著『中国革命への挽歌』七六～七七頁。

(39) 前掲王錫榮著『魯迅生平疑案』所収「魯迅給中共中央致過賀電嗎」参照。二〇〇五年版『魯迅全集』書信卷（第十四卷）はこの祝電を、「紅軍の黄河東渡対日本軍作戦祝賀のために書かれた。起草者未詳」との注記を施し、「附録」として収録した。これはこの「祝電」を魯迅の著作（書信）と認定することへの『魯迅全集』編者の躊躇を表している。

(40) 朱正明著「関于魯迅給毛主席送火腿和書信的問題」（『魯迅研究月刊』一九九〇年、第二期）など参照。

（補注）再校に際して、『申報』の一九三〇～三一年分を見たが、民国二十年（一九三一年）年四月十四日付紙面に、「贛境赤匪窮蹙実況」という記事の「赤匪残酷情形」の段が、江西根拠地における肅清に触れ、共産党が「国民党員、A B 団、豪紳地主、資本家、知識分子、国軍官兵」などを殺しているとし、被殺者数の表を掲げている。吉安では八九七八人、他地区合計一三八八二人とする。類似の短い記事も散見するが、この日の記事が最も具体的だ。『申報』紙を魯迅が見てみたことは『魯迅全集』で確認できる。増田が個人教授を受け始めた時期と、この新聞記事の時期とは符合する。魯迅はこの記事をもとに増田に「共産党が農民を殺しているという噂」を語った可能性もある。いづれにせよ、江西根拠地におけるA B 団に関わる大規模な肅清は、短時間にして上海に伝わっていたことが確認できるわけだ。

付記

魯迅の毛沢東、スターリン、共産党との距離と危惧について、増田渉の証言から考察してきたが、公平を期すために一言付け加えるならば、魯迅には権威におもねらないアンドレ・ジツド的批判精神とともに、あくまでも親ソ派⇨スターリン礼賛者と見なされていたロマン・ロラン的な政治・情勢判断を優先する面もあったと言わざるを得ない。（前者を主、後者を従と筆者は見るが）たとえば、「我々はもはや騙されない」（『南腔北調集』所収）では、現在ではスターリン体制下の冤罪とされる、反革命事件、産業党事件に触れ、「我々は帝国主義とその侍従たちに、まったく長期にわたって騙さ

れてきた。十月革命のあと、彼らはソ連がどんなにまずしくなったか、どんなに兇暴であるか、どんなに文化を破壊したか、そればかりを語ってきた。しかし現実の事実はどうか。小麦と石油の輸出は、世界を驚かせたではないか。正面の敵である産業界の首謀者は十年の禁固に処せられただけではないか」と言っている。

しかし、これはあくまで帝国主義(者)＝「敵」に向けての発言であり、そのことによって(どのような形で発せられるべきかについては、慎重なメディア選択、発言場所の選択が行われ、そこに魯迅の政治判断が見て取れるが)、内共産党及びその周辺勢力に対する批判的言辭・思考が鈍ることはなかったと考えられる。

ちなみに当のロマン・ロランだが、その死後五十年を経て公開された、一九三五年当時のソ連滞在日記には、ジツドにも通じるスターリン体制への危惧が記されていた(中国語訳は夏伯銘訳『莫斯科「モスクワ」日記』上海人民出版社、一九九五年)。さらにロマン・ロランの一九三六年八月の日記には「モスクワのトロツキー分子に対する暗黒裁判は、ソ連にとつての最も良き友人たちにも不安を感じさせる」「まさか、スターリンとその近臣たちは完全に理性を失ってしまつたのであろうか」などという記載があるという(本稿注31の嚴家炎論文の注30。ちなみにこの二文は中訳本「訳者前記」三―四頁で紹介されている)。生前ロマン・ロランはそうした危惧を発言する勇氣を持たなかった、あるいはそうした政治判断しかなかったということになるであろう。ロランの『莫斯科日記』は中国では翻訳公刊当時、ずいぶん話題になったが、日本では一般的には、ほとんど反響がなかったのではないか。なお、このことは、拙稿「中上健次・トロツキスト・魯迅」(『國文学』二〇〇六年十二月号、学燈社)の注でも少しく触れた。

付記注

これは『莫斯科日記』ではなく、その翌年にスイスで書かれた日記の一部のようである(一九二二年―一九三七年、ロランはスイス在住)。ここでの夏伯銘の引用出典については未詳。なお、『ロマン・ロラン全集』第三一巻(みすず書房、一九八二年)に『莫斯科日記』の一部が「ゴリーキー邸滞在記」として収録されている(一九三六年のこの日記は未収録)。同日記の全面公開遅延の原因については、同書巻末の解説及び中国語版「訳者前記」参照。また、錢林森編訳『羅曼・羅蘭自伝』(江蘇文芸出版社、二〇〇一年)も『莫斯科日記』の一部を載せている。